福音新聞
THE GOSPEL NEWS

在日大韓基督教会
宣教110～120周年
標　語
共に生きる
いのちの天幕を
広げよう

1963年9月20日　第3種郵便物認可（毎月一日発行）
2024年7月1日（月）第839号
発行所　福音新聞社（1部100円）
〒169-0051東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3202-5398 info@kccj.jp
発行人 / 梁栄友・編集人 / 鄭守煥
印刷所　青丘文化社

青年主日メッセージ

静かにささやく声

＜列王記上19：8～15＞

金　聖　泰　牧師（東京教会）

聖書本文は、預言者エリヤが「ホレブ」という山に着いたところから始まっています。エリヤの身体は疲れ果てています。彼は40日間、過酷な荒れ野を一人で歩き続け、ようやくこのホレブ山に着いたのです。身体の疲れはゆっくり休めば取れるでしょう。しかしこのときのエリヤは身体だけでなく、心も、そして主（ヤハウェ）に対する信仰も、ボロボロにすり減っていました。

この山の別名はシナイです。この山はエジプトからイスラエルの民を導き出すためにモーセが主（ヤハウェ）によって召し出された場所であり、十戒を授かった場所でもありました。エリヤはそのことをよく知っていたと思います。心身が疲れ果て、信仰が揺れているエリヤはこの「神の山」で主と出会う必要があったのです。だからこそ、主は荒れ野をさまようエリヤに御使いを送り、焼き菓子と水で力付け、ここまで歩ませたのでしょう。

しかし９節を見ると、エリヤはこの神の山に着いたにもかかわらず､主(ヤハウェ)と出会おうとしません。彼は山にあった洞穴（洞窟）に籠もってしまいます。そしてそこで夜を過ごしました。洞穴に籠もるエリヤの姿は、彼が「何から」逃げていたのかを示しています。エリヤはイゼベルの脅威から、頑ななイスラエルの民から逃げていただけでなく、主からも逃げていたのです。神の山にいるにも関わらず、洞穴に閉じこもって、主を避けています。

しかし主はそのようなエリヤの名前を呼び、歩み寄って語りかけられます｡「そこを出て､山の中で主の前に立ちなさい｡」（11節前半）エリヤは洞穴から出なければなりません。主はこの山でご自身を顕し、エリヤが絶望しているあらゆる問題を凌駕する方だということを体験させようとしておられます。主は「どのように」ご自身を顕されたのでしょうか。そしてエリヤを洞穴から出させ、再び主の前に立たせたのは「何」だったのでしょうか。

11節と12節を見ると、主が通り過ぎて行かれるとき､「激しい風」「地震」「火」が起こったとあります。これらは聖書の至るところで「神の顕現」に伴うとされている自然現象であります（王上18：38、イザ29：６、エゼ１：４など参照）。しかし本文にはこれらの現象の中に「主はおられなかった」とあります。

このときのエリヤは、風の中にも、地震の中にも、火の中にも主（ヤハウェ）を見出すことができなかったのです。洞穴に逃げ込み、閉じこもっているこのエリヤを動かしたのは、意外にも「静かな声」でした。

「…火の後に､静かにささやく声が聞こえた。それを聞くと、エリヤは外套で顔を覆い、出て来て、洞穴の入り口に立った｡」（12b ～ 13節）

激しい自然現象が起こった後に、主は静寂の中でエリヤにささやくように声をかけられます。その声は小さくて聞こえないのではなく、むしろ反対に、閉じこもるエリヤのそばに主がおられることを確かに感じさせるものでありました。主の声を聞いたエリヤはまだ外套で顔を覆っていますが、自らの足で洞穴から出て主の呼びかけに向き合い始めます（14 ～ 15節）。

私たちは７月14日に「青年主日」を迎えます。特に今年は総会において青年主日が制定されてから70年になる節目の年でもあります。本文にあるエリヤを通して、今私たちの教会にいる青年たち、そして教会を離れている青年たちの姿を見ます。

絶望と孤独に苛まれ、心身が疲弊し、主（ヤハウェ）への信仰にまで亀裂が入ったエリヤは、洞穴に籠もりました。しかし主はそんなエリヤに背を向けられませんでした。先に歩み寄り、名前を呼び、エリヤの状態を深く理解した上で「静かにささやく声」をもってご自身を顕されました。静けさの中でエリヤにささやく主の姿は、その歩み寄りが決して一方的ではなかったことを示しています。

私たちの教会の青年たち、離れている青年たちは今どのような状況にあるでしょうか。それぞれの青年の抱える状況、心身の状態、信仰の状態に私たちはどれほど積極的に目を向けているでしょうか。70年目の青年主日にささげられる私たちの切なる祈りが、青年たちに対する「静かにささやく声」のような働きかけへと導かれていくことを願います。

韓日対照讃頌歌販売

韓国の新讃頌歌版です。交読文も韓日対照で掲載されています。
●B6版変型・1483ページ
●価格：2,500円
（消費税・送料込み）
※お求めは総会事務所へ

韓日対照聖書販売

各ページの左に韓国語（改革改正訳）、右に日本語（新共同訳）が掲載されています。
●A5版変型･1760ページ､革製
●価格：4,000円（消費税･送料込）
※お求めは総会事務所へ

全国女性会

第63回定期大会を開催

新会長に宋福姫（名古屋）氏が再選

2024年６月17日（月）、全国教会女性連合会第64回定期大会が大阪教会にて開催された。

第１部の開会礼拝では金必順牧師(第五代総務)より「流れに抗して（ルカ18章１～８節）」という題目で説教があり、鄭然元牧師（大阪）の司式で聖餐式が執り行われ、配餐員は朴英遠、鄭仁仙、金錦順、金瑪璃長老が奉仕した。

第２部では、KCCJ総会長の梁榮友牧師より祝辞をいただき、会順にしたがい大会を進行、第63回期大会議録、委員会議録、総括、各局、各地方会、会計決算報告が承認された。

第３部では役員改選、活動方針案、案件討議、献議案、予算案が承認された。

閉会礼拝では朴栄子牧師（第６代総務）より「ここが教会なのだ！（使徒27章33～38節）」という題目で説教があり、祝祷をもって閉会した。

第64回定期大会にて選出された新委員は以下の通りである。

会長：宋福姫（名古屋）　副会長：崔美恵子（武庫川）
書記：高慶美（大阪）　副書記：李敏禮（西新井）
会計：李銀珠（横浜）　副会計：慎静子（豊中第一復興）
教育局：金錦順（布施）　宣教社会局：韓榮蘭（福岡）
財政局：姜志鮮（大阪）　心のケア局：尹豊子（神戸）
関東会長：金恵珍（川崎）　中部会長：李正子（名古屋）
関西会長：金仁姫（京都）　西部会長：梁律子（神戸）
西南会長：李好子（小倉）
会計監査：朴英遠（品川）、兪貞恵（武庫川）
総務：石橋真理恵

（報告：高慶美書記）

2024年日韓合同異端・カルト対策セミナー開催

大韓イエス教長老会（統合）総会が主催

去る６月20日～21日、韓国の大邱第一教会にて2024年日韓連合異端・カルト対策セミナーが開催され、日本からは日本基督教団をはじめ、長い間カルト問題で一緒に活動してきた諸教団の代表と共に在日大韓基督教会からは宣教委員長の趙永哲牧師と宣教委員の金柄鎬牧師が出席した。

今回のセミナーを主催し招待したのは、大韓イエス教長老会（統合）総会の異端/カルト対策委員会であり、その始まりは30年前、日本において有名な芸能人の統一教会合同結婚式や霊感商法などが日本において社会問題となり、被害者を救い、支援するために日本基督教団を中心に「統一教会原理問題連絡会」が組織され活動してきた。韓国の大韓イエス教長老会（統合）異端/カルト対策委員会とは年に１回、相互に訪問して情報を交換し、対策セミナーを開催している。

近年日本では、統一教会だけでなく、様々な異端宗教が韓国から入ってきて教会を混乱させ、社会的な混乱を起こすようになったため、この連絡会の名称を「カルト問題キリスト教連絡会」と名称を変えて活発に活動しており、日韓合同セミナーも2004年から毎年定期的に相互訪問して開催している。

今回の大邱で行われたセミナーに韓国側の発題者として登壇した黄恩澤牧師（統合）は、牧師の息子として大学時代に新天地に惑わされ、脱会して神学大学院に入学し、牧師になった後、新天地に陥っている人々を救う活動をしており、彼の活動と経験を披露した。

日本側の発題者としては、日本基督教団仙台宮城野教会の齋藤篤牧師が担当した。齋藤牧師は彼の著書「私が「カルト」にゆがんだ支配はすぐそばに」を紹介しながら、カルトとは何か、カルトの判断基準はどうなのか、カルトと異端の違いは何なのかなどについて質問した。齋藤牧師はかつてエホバの証人の信徒であったが、脱退後に神学大学に入り、牧師となり、連絡会の世話人として活動している。

二日目には、新天地の教祖李萬熙氏を聖域化している地域（慶尚北道青島郡豊角面峴里）を訪問した。この集会は、来年は日本で行う予定である。　（報告：趙永哲）

西南地方会

金承熙牧師委任式挙行

下関教会に担任牧師として赴任

去る2024年５月26日（主）下関教会にて金承熙牧師の委任式が執り行われた。

臨時堂会長の金聖孝牧師の司会で礼拝が捧げられ、説教は辛治善牧師（西南地方会長）が「勝利する牧会者」（出エジプト17章８～16節）という題名でされた。

金聖孝牧師が金承熙牧師を紹介し、辛治善牧師の司式で誓約、宣言が行われた。李恵蘭牧師（折尾教会）と林明基牧師（福岡教会）が勧勉をし、尹善博牧師（西南地方会副会長）と餅原研一牧師（日本基督教団山口西分区委員長）、日本キリスト教会下関教会の李柄斗牧師による祝辞があった。

この度、下関教会の担任牧師として委任された金承熙牧師は1964年に兵庫県で生まれ、大阪西成教会（協力牧師）、西宮教会（担任牧師）、岡山教会（担任牧師）、折尾教会（協力牧師）で奉仕した。家族には妻、角城かおりさんがいる。　（報告：趙顯奎牧師）

＜住所変更＞

崔栄信 隠退牧師
〒810-0066 福岡県福岡市中央区福浜1丁目1-14
市営福浜住宅14棟711号

関西地方会

“子どもたちの集まり”開く

7教会から29名の子どもたちが参加

６月９日、総会オリニ主日に大阪教会で関西地方会教育部主催による「子どもたちの集まり」が開催された。７教会から29名の子供たちと大人を含め74名が参加し、とても賑やかな会となった。

１部の礼拝は、吉井秀夫長老が良きサマリア人のお話をしてくださり、２部はグループに分かれ、幼稚部から小学３年生までの子どもたちは、少年ダビデとゴリアテの紙芝居を役の担当を決め一生懸命読んでくれた。小学４年生から中高生は、ハンドベルなどの楽器を使い素敵な讃美をしてくれた。

３部は短い時間で練習したものを発表する時間であったが、子どもたちの可能性とエネルギーを大いに感じる恵みに満ちた時間となった。

少子化が問題視される現代にあって、子どもたちが希望の光であることを改めて実感することができ感謝である。

（報告：新井由貴牧師）

関東地方会と中部地方会

教役者合同交流会開く

2024年6月24日（月）～25日（火）にかけて、長野県において、関東地方会・中部地方会、教役者交流会が開催され、16名（各地方会８名）の牧師が参加した。

長野教会に集合し、金容昭関東地方会長がローマの信徒への手紙12：11によるメッセージを伝え、開会礼拝をささげた。長野教会のまごころのこもった昼食をいただいた後、数々の観光地も訪れた。とりわけ、植民地であった朝鮮半島から強制連行された人々を含め、戦争末期に「首都移転」のために掘削された地下壕である松代大本営を訪れたことが意義深かった。小学生を含めた数千人に及ぶ人々が、1944年の11月から1945年８月までの突貫工事に動員されたこの工事がもたらした暴力の本質はどこにあるのか。深い問いを参加者すべてが共有した時間であった。

夕飯後の交流の時間には、朝鮮族、朝鮮籍、在日コリアン、韓国出身など、実にさまざまな背景を持つ人々が集う在日大韓基督教会の宣教課題について、活発な話し合いがなされた。自分の経験に根ざしたさまざまな経験の交換の場は、形式的な会議では達成できない人間の「出会い」が与えられる場でもあった。

二日目は、観光ののちに千曲ビジョン教会にて、崔和植中部地方会長が、詩篇133：1をもとにメッセージを伝え、千曲ビジョン教会の方々におもてなしいただいた。対面でおこなう交流は、文字には表すことのできない「出会い」と相互の貴重な経験を共有する機会になりうるという意味で、今後の各地方会や総会にとって欠くことのできない貴重な場であることを痛感した。

（報告：金迅野）

青年主日制定70周年

共に歩み、未来へ繋ぐ信仰

信徒委員長　梁　陽　日　長老

2024年７月14日、青年主日制定70周年を迎えます。この節目を記念し、全国レベルで礼拝を行い、青年の成長と信仰継承を祈念するとともに、交流行事を推進する予定です。福音新聞を通じて、全国の教会関係者の皆様に、地方会・個教会レベルでの青少年育成と青年会支援へのご協力を改めてお願い申し上げます。

信徒委員会は、近年、青年会全国協議会（全協）をはじめ各地方会青年会連合会の再建支援に尽力してきました。しかし、全国的に青少年・若年者（30代、40代の成人）の信徒減少と教会運営の危機的状況が顕著です。信徒委員会としてはこの課題克服と解決に向けて、皆様と共に更なる取り組みを進めていきたいと思います。

110年以上の歴史を持つ私たちの総会は、旧植民地出身者とその子孫である在日コリアンの民族的信仰共同体として歩んできました。今では新規渡日の韓国人や日本人信徒も大事な仲間として根付いています。最近は朝鮮族を含む中国人、ベトナム人、ブラジル人など、アジア系・南米系信徒の増加により、多様なルーツを持つ「神様とつながる祈りの居場所」へと歩みを進めています。

しかし、全国的な信徒減少と信仰継承の困難という厳しい状況に直面し、これまで教会が二重文化・二重言語の共存、信仰継承、多様性の実現に向けてどれだけ取り組んできたのかが問われています。今こそ、次世代の信仰継承や教会の将来構想策定など、具体的な問題解決の実践が求められています。特に2020年から始まったコロナ禍は、世界的に生命や安全を脅かす困難をもたらし、私たちの信仰が試されています。同時に、このような危機的状況だからこそ、希望を創り出す教会活動にチャレンジしていく必要があります。将来振り返り、「しんどかったけど頑張ってよかった」と言えるように、現代におけるイエス・キリストの福音実現に向けて行動しましょう。

私たちの信仰の原点は、主イエスが述べられた「私の後に従いたい者は、自分自身を捨て、自分の十字架を背負って、私に従いなさい」という御言葉にあります。さらに「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、私のため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである」という御言葉で、信仰とは困難を乗り越えて得られる希望であることを確信させてくれます。

あらためて青年主日制定70周年を機に、すべての信徒と共に成長できる教会づくり実現に向けた協働を皆様に呼びかけます。マラナ・タ！（主よ来てください）

2024 日・韓・ 在日教会≪ URM- 移住民≫ 国際シンポジウム共同宣言

「人を分け隔てしてはなりません」

ヤコブの手紙２章１節

韓国基督教教会協議会と日本キリスト教協議会都市農村宣教委員会、外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会は、日･韓･在日教会が直面している課題を検証し、強固な協力関係を構築するために2024年5月13 ～ 15日、韓国大田ビンドル共同体教会で、「不平等と差別を越えて――東アジアの和解と平和を求める日・韓・在日教会の宣教課題」という主題のもと2024日・韓・在日教会≪URM−移住民≫国際シンポジウムを開催しました。

現在、日本社会では、平和憲法9条を含む憲法改悪を推進しようとする政府と、平和を目指す市民との間に葛藤が深まっています。一国の政策が他国に及ぼす影響が非常に大きい今の時代は、憲法も一国の利益だけでなく、国際社会の安全と幸福を保障する方向に進まなければなりません。ところが、日本政府は市民社会の反対にもかかわらず、平和憲法9条を改悪し、軍事力を強化し、戦争可能な国家としようとしています。特に「平和を維持し専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努める」と宣言した平和憲法の改悪の試みは、日本国内の葛藤と分裂に留まらず、朝鮮半島とアジア全体の平和を脅かす不安要素になっています。

また、難民申請者を国外追放しようとする改悪入管法が6月10日から実施され、さらに永住取り消し法案が国会で審議中です。これらは、日本国内に居住する外国人に対する明らかな差別政策であり、分断と排除による軍事国家への布石です。

韓国社会も平和が脅かされ、葛藤が高まる危機の中にあります。キャンプデービッドで開かれた米･韓･日3者首脳会談に参加するなど、米･韓･日安保同盟を強化し、敵対的な対北朝鮮政策を固守しています。これは、東アジア全体の安全と平和を脅かしています。

また韓国では、社会的両極化による不平等が深刻になり、社会的葛藤の溝も日増しに深まっています。労働市場での雇用柔軟化が無分別に拡大し、数多くの非正規職労働者が量産され、正規職と非正規職の間の不平等と差別はますます激しくなっています。尹錫悦政府になって、労働組合を不法化し、取り締まりの対象とするなど、労働者敵対政策が本格的に稼動し、労使葛藤だけでなく労政葛藤も深まっている現実です。それだけでなく、外国人投資企業の現地労働者に対する横暴、これを黙認する国内司法機関と行政機関の無関心により、数多くの労働者が正当な労働権を奪われたまま苦痛を受けています。

また、韓国政府は40万人に達する未登録移住民に対する根本的な解決には背を向けたまま、不法滞在削減5ヵ年計画など取り締まりと追放にだけ力を入れており、この過程で政府の反人権的で権威的な行動によって韓国内の移住民の人権を深刻に侵害しています。

前述した日韓両国で起きている不正義な現実は、もはや一国だけの問題ではなく、国家の誤った方向と政策に対して見過ごさず、市民社会がブレーキをかけなければなりません。

特に、日本と韓国の市民社会と教会が先頭に立って両国の共同の歴史を真剣に反省し、両国国民間の理解と和解、治癒と和合の場を積極的に設け、持続可能な平和と共存のための基礎を固めるために共同で努力していかなければなりません。

不平等と差別によって苦痛を受けている人びとに自分から近づいて手を差し出したイエス様を見習って、痛む人と共に痛み、泣く人と共に泣くことで神の国をこの地に成し遂げていくことが、2024日・韓・在日教会≪URM-移住民≫国際シンポジウムに私たちを呼び集めた神様のみ旨だと告白します。

そのために私たち日・韓・在日教会は次のような共通の課題に取り組んでいくことを、ここに表明します。

1）私たちは帝国主義と覇権主義の誤った歴史を直視し、アジアと世界の平和を実現する国になることを誓った日本国憲法前文の具体化である憲法9条を守るために力を尽くして連帯していきます。

2）私たちはグローバル企業が他国の労働者を差別し、日常的に行なわれている反人権的行為に対して厳重に抗議し、イエス･キリストがくださった信仰と良心により、苦難を受ける労働者と協働し、労働正義実現のために連帯していきます。
特に、日東電工株式会社の子会社である韓国オプティカルハイテック社の精算によって不当に解雇された非正規労働者と連帯し、地位と人間の尊厳の回復を支援します。

3）私たちは、日本において永住資格取り消し法案が撤回されることを求め、韓国において季節労働者など移住民に対する不当な待遇が改善されるように絶えず声を高め連帯していきます。
また、極めて低い難民認定率からも分かるように、閉鎖的で排他的な難民政策を固守している日韓両国政府に向けて、難民認定制度の改善および人種差別撤廃法案の制定を持続的に要求していきます。

4）私たちは、非正規労働者、移住民など、社会的少数者と弱者の痛みに背を向けず、その人たちの声に耳を傾け連帯します。

5）私たちは、今回確認された共同の課題への対応と日･韓･在日教会の相互交流を深めるため、2025年に移住民協議会、2026年にURM協議会をそれぞれ日本で開催し、2027年にURM-移住民国際シンポジウムを韓国で開催します。

2024年５月15日

2024日・韓・在日教会≪URM-移住民≫国際シンポジウム参加者一同